

思春期精神遅滞児の女子相互作用

(1) 面接経験から

岩 田 崇(慶大小児科)
秋 山 泰 子(//)

(1) J. Bowlby は、乳児期に母子関係でアタッチメントが成立している人は、将来困難な事に出あった時に、母親代理のような適当な人に相談する能力を発揮すると、母子関係の精神療法論の中で述べている。この説は、精神遅滞児の親の相談に当たって示唆されることが多い。即ち、誰にも相談せずに閉じこもる人、相談者は次々と変える人、見当違いの人に相談する人、また適当な相談者を選んでその人との関係を持続する人などの個性的な相談行動にアタッチメントの成立の良否がうかがわれる。

(2) 一方、E. H. Erikson は、自我心理学の立場から、自我同一性の発達過程を次のように段階づけている。即ち、乳児期の基本的信頼対不信の感覚獲得に始まり、幼児前期は自律性対羞恥・疑惑、幼児後期は積極的対罪悪感、学齢期は生産対劣等感、思春期に同一性対同一性拡散に至り、成人期の親密さ対孤立に向う。このような経過を辿

ってすでに成人期のパーソナリティに至った人が、精薄児をもつという予想外の出来事に突然出あった時、内面的には自尊心 self-esteem がそこなわれて危機に直面すると考えられる。この事態から精薄児の親としての同一性を獲得する困難な道が始まるのであるが、この時期にいち早く適切な相談者に依存して信頼関係を成立させ、それを基盤にして自律的、積極的、生産的に育児行動を行い、やがて精薄児をもった親としての同一性成立の様相を見せ、親密感をもって社会的生活を送る立派といえる親が少くない。しかし他方、不信感が強くて相談者との信頼関係が成立せず、羞恥、罪悪感、劣等感が強く、精薄児の親としての同一性が拡散しているとみられる親も少くない。

(3) 今後の課題： 上記の臨床的印象を今後母子相互作用の観点から検討を行いたいと考えている。